

動詞の否定丁寧表現「ません」と「ないです」に関する考察

田中香代子

東京学芸大学大学院 教育学研究科

国語教育専攻 日本語教育コース

m091432g@u-gakugei.ac.jp

1. はじめに

現代日本語では、否定丁寧表現として用いられる形式が2種類存在する。

(1A) 飲みません。 (2A) 明日は行きません。

という「ません」の形式と、

(1B) 飲まないです。 (2B) 明日は行かないです。

という「ないです」の形式である。本来、動詞の否定丁寧表現は「ません」を用いるが、話し言葉では「ないです」が多く使用されている。本研究は、これら2種類の使用実態を調査し、違いを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

動詞の否定丁寧表現に関する先行研究は多数ある。田野村(1994)は、書き言葉コーパスである新聞記事から述語否定形の用例を集計し、「ません」16631例、「ないです」268例という集計結果を出している。この先行研究では、書き言葉コーパスの影響が大きくあると指摘できる。

それに対し野田(2004)は、若年層に対する用例調査とアンケート調査を行い、自然談話では「ないです」が多く使用される一方で、「ません」は規範的な形として位置づけられていると述べている。しかし、野田(2004)で使用したコーパスは自然談話のみを取り上げたものではないため、動詞の否定丁寧表現の件数は「ません」が多いという結果である。

このように、動詞の否定丁寧表現はコーパスにより使用が異なるといえるが、自然談話のみをコーパスとした研究はほとんどなく、多くは「ません」の出現が多いと述べている。これらの結果については、コーパスを自然談話のみにしぼり再検討が必要であると感じた。

3. 談話分析による調査

3.1 調査目的と概要

3節では、自然談話のみをコーパスとし、談話分析を行う。調査目的は、

- ① 自然談話において「ません」「ないです」の使用件数はどれくらいなのか。
- ② 「ません」「ないです」の使用の違いは何か。

の2点を明らかにすることである。

調査対象は、2008年5月19日～フジテレビ「笑っていいとも」番組内の「テレフォンショッキング」のコーナー（月曜～金曜日 12:10 頃からの約 10 分間）と、2008年7月20日～日本テレビ「おしゃれイズム」（日曜日 22:00 からの 30 分間）の間に話された司会者とゲストの会話である。本稿では、この調査対象を自然談話とし、否定丁寧表現を探した。「笑っていいとも」からは、100名のゲストの自然談話を、「おしゃれイズム」からは、4名のゲストの自然談話を採取したため、調査人数は 104 名となる。この人数の中に司会者は含まないが、司会者の発話の中で使用された否定丁寧表現も使用件数の対象とした。この談話分析で得られた否定丁寧表現を検討する。

3.2 調査結果

上記の条件で動詞の否定丁寧表現「ません」「ないです」の使用件数を比較する。次の<表 1>は、動詞と、動詞以外の活用する品詞の 2 種に分類して使用件数を比較したものである。

<表 1>否定丁寧表現の使用件数

	動詞＋ 「ません」	動詞＋ 「ないです」	名詞、形容詞、形容 動詞＋「ません」	名刺、形容詞、形容 動詞＋「ないです」
使用件数	84 例	254 例	1 件	180 例

談話内に、否定丁寧表現は総数 519 例あった。その中で、動詞の否定丁寧表現「ません」は 42 例、「ないです」は 254 例確認できた。「ないです」の使用は「ません」の約 3,0 倍もあり、野田（2004）の用例調査とは異なる。動詞以外の品詞も加えると、「ないです」は総数 434 例あり、「ません」の約 5,1 倍にもなる。これは、「笑っていいとも」「おしゃれイズム」が純粋な自然談話に近いものであるからだと考えられる。

4. 談話分析の考察

4 節では、談話分析で得られた使用例について検討し、その考察を 2 点述べる。

4.1 「ません」と「ないです」の意味と言語形式

まず、談話内に使用した動詞＋「ません」の例文を記載する。

(3) T: 司会者 (60 代男性) C: ゲスト (30 代女性)

T・	はいはいはい。で。
C・	仕事って結構遅いんですよ。なので、夜 10 時過ぎになると眠いんですけど
T・	はい。ああ、はあはあ。ああ。そりゃ <u>知りません</u> 。
C・	そうもいかない日もあるから。結構今眠い。あはは。
T・	そりゃ <u>知りません</u> 。10 時過ぎると眠いつてのはちょっと早くないですか？
C・	あはは。

このような用例を含めた調査結果から見ると、「ません」の使用に関して以下のような特徴が見られた。

「ません」はフォーマルであるという意識が強く、話者の強い否定が現れやすい。また、断定の意味や、言い切りの形が多い。それは、丁寧さより否定の意志が強く現れる（丁寧（ませ）＋否定（ん）の順序で現れる）という言語形式が影響していると考えられる。これにより、話し手は聞き手に否定の機能を強調できる。より文末に近い位置に来る表現が強い印象を与えるとすると、「ません」は否定の機能が強い印象を与えている。

次に、談話内に使用した動詞＋「ないです」の例文を記載する。

(4) T: 司会者 (60代男性) S: ゲスト (50代男性)

T・えそんなことやんの。	あー
S・	だ、はい子供たちがその、育てたじゃがいも それをまああれし
T・	へえ。 ほお。あ作ってるんだ
S・て、じゃがいもを楽しもうと。 まあ結構先生たちは大変ですね。 ねー。	
T・じゃがいも。	あー。
S・	ていうか、包丁なんかあんま使わないですからね。ねー。大変でしたよ。

このような用例を含めた調査結果から見ると、「ないです」の使用に関して以下のような特徴が見られた。

「ないです」は、口語で多く使用される。野田（2004）の指摘通り、終助詞を伴いやすく、動詞＋「シテイル形」と結びつきやすいという結果を得た。それは、否定の機能より、丁寧さが強く現れる（否定（ない）＋丁寧（です）の順序で現れる）という言語形式が影響していると考えられる。これにより、話し手は聞き手に丁寧さを強調できる。より文末に近い位置に来る表現が強い印象を与えるとすると、「ないです」は丁寧さが強い印象を与えている。また、さらに否定表現という話者本人の強い主張を和らげる効果があるのではないかと考える。

つまり、これら「ません」と「ないです」は、この言語形式が置かれた文脈に応じて発揮する語用論的な機能の違いを持つ。「ません」は否定を、「ないです」は丁寧さを機能とすると考えられ、談話では丁寧さを重視するために「ないです」の使用が高まるのだ。ここに「ないです」の必要性が生じている。

4.2 「ないです」が接続しやすい動詞

「ないです」が接続しやすい動詞の特徴として、動詞「シテイル形」があげられる。この使用件数を<表2>に示す。

<表2>動詞「シテイル形」に接続する否定丁寧表現

	ません	ないです
動詞「シテイル形」	4例(4,7%)	42例(16,5%)

動詞「シテイル形」＋「ないです」には2つの可能性がある。1つは(5B)のような、動詞「シテイル形」＋動詞「ある」の否定丁寧形「ないです」、もう1つは(5C)のような動詞「シテイル形」＋動詞「いる」の否定丁寧形「いないです」が省略された「ないです」である。

(5A) 書いてありません。 (5B) 書いてないです。

(5C) 書いてないです。 (5D) 書いていないです。

(5B)の動詞「ある」の否定丁寧形「ないです」は、人、物、事、現象などの広域な非存在を表現する。それに対し、(5D)の動詞「いる」の否定丁寧形「いないです」は、人などの動きを意識したものの不在を表現する。(5D)は、否定の対象が(5B)に比べ限定される。そのため(5B)に含まれる(5D)は、談話内において省略が可能となり、簡易化される。これにより(5D)は、(5B)と同音、同形態の(5C)になり、動詞「シテイル形」＋「ないです」の出現が多くなる要因になるのではないかと考える。しかし、今回の談話には(5D)の形のままで出現はないため、さらなる調査が必要であると感じる。

5. まとめ

今回の談話調査では、「ないです」の使用が「ません」の使用を約3倍も上回る結果が出た。また、その理由として、「ません」と「ないです」の形態的な違いがあること、そして語用論の観点から、話者は丁寧さを表す形態が最後に来る「ないです」の方が丁寧だと感じていると考えられる。動詞＋「ないです」は、自然談話において「ません」と以上に認知され、使用されていることがわかった。

また、今回の調査で、動詞「シテイル形」＋「ないです」だけではなく、動詞「シテイル形」＋「ません」も使用され始めていることがわかった。動詞の否定丁寧表現の規範とされているものは、現段階で変化し続けていると推測でき、これから談話内においてさらなる広がりを見せるだろう。

参考文献

田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査—「～ません」と「～ないです」—」『大阪外国語大学論集 11 号』

野田春美 (2004) 「否定ていねい形「ません」と「ないです」の使用に関わる要因—用例調査と若年層アンケート調査に基づいて—」『計量国語学 24 巻 5 号』

小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育 125 号』

川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響—動詞否定丁寧形「(書き)ません」と「(書か)ないです」の選択傾向を例として—」『日本語教育 129 号』